
好かれ者！

星 アキラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
好かれ者！

【Nコード】
N9519K

【作者名】
星 アキラ

【あらすじ】
スポーツはまあ大体できてそれなりに器用、でもバカな主人公と俺は“高橋 澄”（たかはし とおる）。
そんな俺はある日先ぱいに追いかけている最中死んでしまい自称、神のうさんくさい子供に“君が気に入ったからぼくの世界へ逝ってもらおうよ”と言われ、とばされたのは知らない所（異世界）で……！？

※更新不定期です※名前に反して結構シリアスな時もあります

n o, 1

まずはゲームオーバーから始めよう(前書き)

なんか始まったぞ新連載！

でも更新不定期予定！！

だから読んでくれた人いららないでね！ W W
とりあえず楽しんでいただけたらいいな！ W

no, 1

まずはゲームオーバーから始めよう

と……とりあえずこんにちわ……！

こん……なへボ作者の……作品……っを読んで……！！
作……者のつごっ……によりっ

この俺……があいさつしてますっ

ん？なんで……こんなに途切れているかって？

それは……っ

「っん、はあっ、はあっ、はあっ」

息を除切らせては息を肺にねじ込むように吸い。ひたすら足を動かすっ

つまり

走る！走る！走る！！！！

俺はひたすら、ガードレールなどで整備させた、アスファルトに葉がちらほらと落ちている坂道を駆け上がっていた

ちらりと横を見るとガードレールの外に立っている木々の間から住宅街が見える

あーあーあっちの方に俺の家が……っってそうじゃなくて！！

なんでYシャツに肩までカーディガンの学制服を着てななめがけバックを肩にかける

このいかにも“きちんと学校行ってますよ好青年です！”スタイルの俺がこんな急な坂道をスポ根アニメみたく全力疾走しているのかという……

「ごおりやあああああ！！待てやああああ！！！！！」

ものすごい雄叫びが後ろから響く

俺がちらりと後ろを見ると、俺と同じ制服を着たゴツい人……まあ“先ぱい”と呼ばれる方々2人が俺をすごい形相で見ながら追っていた

てか“ごおりゃあ”ってダサイっすセンパイ

「待ちません。たとえ母さんに止められたってボクは止まりません。」

思いつきり棒読みで俺はそう返す

普通なら火に油を注いであつという間に追いつかれてボコられ

“戦闘不能、蘇生術は使えません”状況におちいりそうだが……心配はいらない

なぜなら

センパイたち……幸運にもトロイ

だからこつちが全力疾走すれば追いつかれないのだ!!

「デメエえええ!!!!」

追いつけなくていらだった1人が何やら言っているが関係ない!

だいたいっそつちが悪いんだぜ!? 帰り道に俺のゲーム仲間“つっ

くん”をかつあげしてたんだからな!

“ちよつと”お仕置きで口にそこらに落ちてた汚れたゴムボールを口につっこんでやっただけだ!!

小学生の時は野球チームでピッチャー、中学では裁縫部と剣道をしている(裁縫とかちよつとおちゃめな)俺をなめるなよ!!

センパイと俺の距離が少しずつひらいていく

このまま逃げきるぜ俺……一一一一

と、その時だった

どんっ

何か…………体に強い衝激が走る

あれ…………？

なんか俺、宙に浮いてる感が

センパイたちが目を見開いて俺を見てる

…………あれれれれれ？！、目の前ガードレールの“外側”…………
ってか木の間……………を

落……………ち……………

がさささささささささ！……………！！

音だけが聞こえる

体の感覚がない

あれ？これってもしかして……………

俺死んだ？

no, 2

死んだらやっぱり天国か地獄がベタ……だよな？

起きるとそこは真っ白な世界でした

「……どこだここ…？」

ぐらぐらと痛む頭を片手で抑えながら俺は周りを見渡す。周りはどこまでも続いており真っ白だった。

上も下も右も左もどこもかしこもである

俺はなんとなく“死んだのか俺……”

と事実確認を脳内で行う

人間とは不思議なものでこう言う状況に陥ると変に冷静になるようだ
ああ…まだクリアしてないゲームあったのになあ……。母さん……
先に逝ってごめんな……。父さん…はげた頭をからかってごめん…、
でもやっぱりアデ○ンス電話した方がいいと思う

…なんて親思いな俺っ…！

そんな事を考えている内に頭の痛みが消えていた……さて

「…ココ、天国かなあ……。面倒臭くない所だったらしいなあ…」
何気無くそう呟いた時だった

―ここは天国でも地獄でもないよ―

「!？」

突然空間に響き渡るように子供の声が聞こえたのだ

「誰だ!？」

ってか天国でも地獄でもないって?!

―僕は……―

「神だよ」

「っ！！、か…神！？！？」

なんとなく想像はしていたが、改めて言われると驚きを隠せなかった
そしてその俺の反応を楽しむように

くすりと笑い声がした後、目の前が眩しいくらいに光り、俺は目を
瞑る

「……………」

……………。

…そしてそっと目を開くと

そこには小4くらいの背丈をした子供が立っていた

…：声が子供だったけど…、ホントに子供だなんて…：。ってか神
って子供だったんだ！！

見るとその神らしき少年は美しい碧の髪にエメラルドのような緑の
瞳をしている

まるで神話アニメからでできたようだ

「……………」

突然すぎて俺はぼーぜんとし、じいーっと少年を見つめる。

すると少年は無邪気に笑って俺の側に寄ってきた

「こんにちは。高橋 澄くん。僕は君たち人間でいう所の神です」

さっきの無邪気な笑いと見た目からは想像もつかない程に気品を感
じさせる話し方だ

そんな少年…ってか自称神に俺は面を喰らいながらもやっと口を開く

「…やっこさん、ホントに神…？」

なんか読者にこの展開絶対神だろ！とか思われそうだけど…、だっ
てさ！神がホントにいるなんて半信半疑だし！

そんな俺に対し自称神は

「うん」

即答。

……なんか即答されると反論できないな……

「……………で、俺の名前も知ってる所を見るとあんたが天国か地獄への案内人？　ってかどっちへ逝くかの裁判……とか？」

あんまり悪いとこしてないから天国いけるかなあ……

苦笑いで問うと、俺の思惑とはうらはらに自称……ああもうめんどいから神でいいや！

…神はあっさりと答える

「違うよ」

「！、違うのか……？」

神はにっこりと笑う

「うん。…君は確かに死んだ。でもね僕が君の魂を霊界に送らずにこの“時空の狭間”にとどめたんだ。だから君は死んだけど君のいう天国や地獄には逝ってないんだ」

……………？

なんだかよく分からない単語が出てきて少し混乱したが辛うじて俺は疑問を口に出すことができた

「な、なんで神さんは俺をその霊界とやらに送らずにここに留めたんだよ……？」

よく意味が分からん。もしこれが霊界になんぞに送らずにこの場で魂を叩き潰す！……とかそういう展開だったら笑えんぞ……

しかし心配そうな俺とは真逆に神は今度、嬉しそうな表情に変わる

「そう！　それが本題！　僕はね…君に第2の人生をあげる事にしたの！」

「……………は？」

今よく分からん単語をだしたぞ神

「簡単にいうと……」

この直後俺はとんでもない言葉を聞かされる

「君が気に入ったからぼくの世界へ逝ってもらおうよ」

っ！！？

「はああああ！？」

神の前で失礼かもしれないが俺は思わずそう叫んだ

「あ、ちなみにぼくの世界っていうのは君からしたら異世界ね。」
俺の心情などお構いなしに神はニコニコとしながら続ける

「実は世界っていうのは色々あってさ、1つの世界に1人神がいる
んだけど、その色々な世界で共通できる場所がこの“時空の狭間”
なんだよ。でも無理やり別の神が管理する世界から君の魂連れてい
くから君の世界の神怒るかもねえ（笑）」

わ……（笑）じゃねえよ神いいい！！？

「何いきなり意味分からん事を言いまくってんだ！！」

「まあその内分かるさ。…あとぼくの世界は君の世界と違って常に
大小構わず危険があるから気をつけて☆」

「き…危険ってお前…！？」

あまりの状況について神をお前呼ばわりしてしまった、ってか☆使う
な神が！！

神は変わらず笑い

右手のちいさな手のひらを俺に向ける

……っ？！

「ああ、でも僕は君が大好きだから簡単には死なないように能力付
けしといてあげるよ。」

そう神が言った刹那

俺の足元に大きな黒い穴が空く

「もしかしたら君は“異質”だからその為に辛い場面に立ち会うかもしれない」

っ!?! なんだこれ…っブラックホー…!?!?

「でも忘れないでね。僕は…神は君を」

その穴に俺は重力に逆らえず落ちてゆく

……っ!?!?!!

その落ち行く中でみた神の表情は大人びた、でも穏やかなものだった

「いつでも見ている。」

そこで俺の意識は途絶えた……

「…………アルハム。君はまた何をしでかしてくれたんだ」

あの少年の姿をした神は後ろに何処からか現れた人物に“アルハム”と呼ばれ振りかえる

その表情はあの無邪気なものとは全く違う大人びて凜としたものだ
「ああ、誰かと思ったらギルシュエブか。」

アルハムに“ギルシュエブ”と呼ばれた人物は見た目30代でフレーム抜きの眼鏡をし、銀に近い灰色の髪 of 長髪を後ろで結んだ男だった

ギルシュエブは小さくため息をつく

「…………私の世界”に存在していた極普通の少年を自分の世界に転生させて…何がしたいのです？アルハム。」

苦悩で少し眉間にしわを寄せるギルシュエブに“しわを寄せるとしわが残っちゃうよ”と冗談混じりにアルハムは言っていると澄が落ちた穴のあった場所を見つめた

「ん？別に何かをさせたい訳じゃないさ。ただ…彼が気に入って死ぬのがもったいないからぼくの世界で生きてもらうだけだよ」

「…………あなたが本当にそれだけでこんな…世界管理当事者の私だけでなく、他の神からも苦情がきそうな面倒事をするとも思えません
がね。」

少し卑屈臭くギルシュエブが言っているとアルハムはまた子供のように無邪気に笑った

「買いかぶりさ。僕は純粹に楽しんでるだけだよ」

「そうですか。……ところで」

断定の言葉を口にされギルシェブはこれ以上探るのは無理だと考え、話題を変えることにした

なにしろアルハムと自分では年季が違う。この男の腹を探ることが出来るものなど極僅かの神だけなのだから

「：アルハム。あなたなんですか？その姿。子供の姿なんかして、恐らくクルシスはいつものあなたの姿の方が好みですよ？」

「いいじゃん☆ぴちぴちでっ。それに僕はクルシスのためにあのかゝるびゅーていふおーな姿な訳じゃないし。」

「……覚えてたての私の世界での言葉を使わなくて結構……。いや、あなたの世界でもありますか？」

それについてもギルシェブは話を始めそうになったが下らないと切り捨て。本題を……この気まぐれで何を考えているのかよく分からない食えない男によって異世界へおとされた少年の事を思い浮かべた

いや

神にとって異世界だとかそういう概念はないに等しいのだけれど

「まあ。精々頑張りなさい。」

様々なことを考えながらギルシェブが出した言葉は不幸ともいえる少年に差し出されたもので、温かいようで冷たいようで放り出すようで見捨てない
そんなものだった

n o, 3

スタート地点は森から（前書き）

つなぎなのですごく短いです＊

no, 3

スタート地点は森から

「は…っ、ははは…」

俺は乾いた笑いをした

…笑うしかねえようっ。だってさ…

「……ココ…何処だよ…？」

あの糞胡散臭い子供の神（自称）に意味の分からん事を言われ落ち、
気が付くと俺は何処か全く知らない森の中にいた

森……と言っても日本みたいな雰囲気じゃない…なんかこう言い表
しにくい雰囲気のある別に嫌な感じはしない森だ
だが……

「ホントになんなんだよっ」

そう吐き捨て自分の体をチラリとみる、すると制服に少し葉っぱが
ついていて俺はそれを取りあの糞胡散臭い神の言葉を思い出した

“君が気に入ったからぼくの世界へ逝ってもらおうよ”

“君に第2の人生をあげることにしたの！”

“ちなみに、ぼくの世界っていうのは君からしたら異世界ね”

「……………」

じゃあ…なんだ？まとめるとアイツは死んだ俺をアニメみたく異世
界に送ったって……事か…？

でもそんなことが現実にあるのか……？あり得んだろうっ…

いきなりの展開過ぎてなんだか俺は頭が痛くなってきた

しかしその時ふとひらめく

…あ、でも案外…夢おちかもしれんぞ。不思議の国のアリスみた
く……

そう思うとなんだか安心してくる。

「…だよな。こんなことが現実にあるわけねえよな、きっとあれだ
死んだ俺が見てる夢なんだよきっと」

よくある漫画の奴だ。俺は今現実では病院で昏睡状態でその間に見
てる夢って奴だよ

そうだ、そうにちがいない！

なんか妙な確信を得ると俺はなんだか気持ちが明るくなってきた

「そうか、…ってかそれで異世界設定なら漫画よんで憧れた異世界
なんだから楽しまなきゃな!!」

自然に微笑みができ、俺は森を歩きだす

現実なら迷うかとも思ってた行くのを迷うが、これは夢、なんにも怖
いことはないさ！

なんて考えて

でも本当にその時はその程度にしか考えていなかったんだ
だって

本当に現実に異世界に來たなんて信じれるわけないだろ？

だから俺は分かっていたなかったんだ

あの神の言った忠告の“危険”の意味と：

これがそのうち醒める夢なんかじゃない事を

明るい太陽に照らされひかり輝く木々の木漏れ日が美しい森の道を俺は特に警戒する事もなく散歩感覚で歩いていた

ココは異世界

でもこれは夢

だから楽しもう

そう思いながら

「ふうーん、見たことない花はあるけどあんまり変わんないんだな……」

本も外国っぽい感じがするだけだ

異世界といってもそんなには変わらないのか？

：なんだかそれだと少しがっかりするな、どうせならファンタステイックなものが出たら面白いのに

まあ人喰い植物とかめんどいのは御免だけど……

夢とはいえ面倒臭いことになるのは嫌なのだ。

「あー……夢覚めたら俺ベツトの上かなー？、人工呼吸器とかつけてんのな」

笑い混じりに呟いてみた

人工呼吸器なんて着けたことがないから少し嬉しい気もする

それでクラスの奴等とかつくくに自慢しよ……

なんて考えた時だった

「い…いやあああ！…だれ…か…っ誰か…！…！」

「！？」

女の人の助けを呼ぶ声が悲鳴と共に聞こえたのだ
…それも結構近い

「……っ！」

俺は反射的にその声のした方に走る

助けを呼ぶなんて…誰かに絡まれたか！？セクハラされたか？！
事故にあったか？！

…あ、でも異世界にそういうのあるのか…？

いやいや！んなこと考えてる時じゃない！

俺は森を走り続ける

…すると視線の先に女の人の姿が見えたのだ

！！、いた！

「大丈夫ですか！？」

走りながら叫ぶと女の人がかつちを向く

それを見て俺は

あ、美人だ

と思わず感心した

…しかし

「……っ」

その刹那、そこにいた女の人以外の存在に俺は気付きそして脳内が
一瞬凍りついた

女の人は動けないように座り込むようにうずくまっています

その女の人の目の前には、日本…いや外国でもあり得ない

カバ程の大きさで見た目が狼、目はギョロリとしたオレンジ色、毛
は黒、爪は遠目でも殺人の為の凶器にしか見えないほど大きく鋭く、

ギリリとしている

……っ！

冷や汗がどつとわく

……俺は本能的に感じたんだ

コイツに狙われたら殺される！！！！

「な、な……？！」

これは夢だ！なのになんだよこのリアル過ぎる恐怖は！？

こんなの………！

「あ……あなた……は……」

「！」

その女の人の声で俺は我にかえる。ぱつと彼女を見ると彼女は希望を見つけたように俺をすがるような目でみた

「助け……て……っ」

……そうだ、これは夢なんだ……！

覚める夢……

だから女の人の1人や2人救え！高橋 澄！！

「……っああ！分かった！」

俺は無駄に元気にそう答えると傍に落ちていた石を拾い、あの化け物を見た

……やっぱり怖い……。けど、怖がることなんて何にもないんだ……！

「っうら……！」

石を俺はピッチャーの構えから放つ

石は真っ直ぐ、それもいつもより速く飛び化け物の額に鈍い音をたてて当たった「ぎゅるおうう……！！？」

叫び声をあげる化け物

「うっ……！」

思わずポーズをとる。

なんかいつもより速くてしかも攻撃力があつたらしく痛そうに化け物は顔を歪めた

「がるううう！！！」

雄叫びをあげた化け物は俺を睨みつけ

ずしんと音をたてて一歩ずつ俺に近づく

「っ……く……くんのか……！」

俺はまた石を構える

……が

なんと化け物はいきなり俺に飛びかかったのだ

「！！！」

化け物は爪をたてあからさまに俺を殺しにかかってくる

ありえない……、考えられない速さで飛び掛かれ俺は反応するのが遅くなり

「うっそだろ……！！！」

石を投げるのが間に合わず反射的に身を守るために俺は両腕で頭を守る

ズシャアア！！！！

「っ……！！！！？」

切り裂かれる音が耳に入る

頬に水滴がつく

そして

今まで感じたことのない痛みが腕からほとばしった

「っうああゝああゝああゝああゝああゝああゝああゝ！！！」

叫び、痛みのあまり涙もでないまま俺は歪んだ表情で腕を見る
両腕は爪で無惨に切り裂かれていて切り離されてはいないけれど無
惨に血が滴っていた

な…ん…だよ…これ…

「きゃあああああ!!?」

後ろで女の子人が悲鳴をあげる

なんで…こんなに痛いんだよ…っ

「うゝ…あゝ…!?」

痛てえよ…

痛てえよ…痛てえよ…!!

“夢”じゃねえのかよ…っ

“夢”ならなんで覚めないんだよ…

「がるううつ…」

あの化け物は再び俺に飛び掛かりそうな勢いで近づく

…覚め…ろ…よ…

「…う…ぐう…っ」

覚めろ…っ覚め…ろ…!

そして化け物は再び俺に飛び掛かる

「がるがああああ!!」

「っ!、た…旅人さまああ!!!!」

こんな悪夢は覚めろ、覚めろ、覚めろ、覚めろおおお!!

「覚めろおおおお!!!!!!」

痛みを噛み殺すように俺は腹の底から声をあげた

この状況全てを否定するように

すると

俺にもなにがなんだか分からなかった

ぱあんっ!!!!

「つぶああがああ!!??」

物凄いなにか弾けるような音と共に化け物は俺に届く前に血とともにかなり遠くへと弾け飛んだのだ

「ーーっ」

それを俺は自分がしたのか他のなにかがそうしたのかそれとも何か

自然現象だったのか意味の分からないまま目を丸くして凝視した

“……トウ”

ふと、なにかが俺の頭の中に響く
しかし俺は

“…メ…デ…トウ”

その声を認識することなく

どしゃっ…

その場に倒れた

“オメデトウ……”

そして俺は

ああやっと……覚める…

そう思いながら意識を失ったのであった

n o, 5

初めてのタウンは驚きがいっぱい(前書き)

今回はけっこう長いですね W

no, 5

初めてのタウンは驚きがいっぱい

……あれ……

俺……

どうなったんだっけ……？

「う……あ………？」

そつと目を開くと木でできた天井が見えた

手探りをするとな自分がベットで寝ていることが分かる

……ベット……？

そうか……俺……家に………

………

………って

「俺んちは木造建築じゃねえええ!!」

がばっ!!

俺は勢いよく起き上がる

…すると

「……………は？」

そこは部屋では…あるけど木造で、外国っぽくて俺の知る場所では無かった

「……………」

俺は背筋に冷や汗が流れるのを感じながらそっと腕をみる

…腕の服部分は無惨に切り裂かれていた。ただし何故か傷はない

「……………！」

…そして

この事実確認は俺に絶望に似た者を与えた

「は…はは……」

この切り裂かれた跡は間違いなく。あの恐ろしい化け物にやられたもの

あの時、

確かに俺は腕を切り裂かれてもう死ぬかと思うくらいの痛みを体験した

それで気絶して

起きて

でも起きた場所は知らない所

腕には切り裂かれた跡

ということはもう現実は……

「……俺…は…本当に……異世界に…来た………」

それしかない……んだよね……？

「……………まじかよ。」

母さん、父さん

こんなことってあんのかな？

俺は今異世界にいる父と母に語りかけると

改めてこの状況について考え始める

「……ホントに……まじで異世界にきた……来てしまったというなら……俺は神直々に送られたんだよな……？」

あの糞胡散臭い子供に

……ってか確かあいつ“簡単には死なないように能力付けしといてあげるよ”とかなんとか言ってた気がする……

「！、じゃあもしかしてあの化け物がぶっ飛んだのと傷が治ってんのってそのお陰なのか……？」

ってか危険ってあの化け物の事か！

「異世界だからもしかして“魔物”とか言ってるのかな……」

ちよっと魔物という言葉に胸が踊る

あの化け物を見たあとだと恐ろしさもあるが、それでも魔物とか異世界というのは憧れの漫画とゲームの世界のようでワクワクするのだからさっきの絶望感が少しだけ緩和された気がする

そして、忘れてならないものがある

「………魔術とか……あるのかな……？」

そう期待を込めて言った時だった

「……あの……旅人さま……？」

「！」

突然呼ばれそちらを見るとそこにはあの俺が守った美人さんがいた何故居たことに気付かなかったかというところこの部屋にはドアがなく入り口はドアと同じ大きさの穴があいているからだ。

だから多分ドアの音もなく彼女は入ってこれたのだ

美人さんは心配そうに俺を見る

「あの……大丈夫でしょうか……？」

「あ、ああ。大丈夫！ほら！」

あまりにも心配そうだったので傷のない腕を見せると美人さんは安心の表情で寄ってきた

「そうね……。あなたをここに運んできた時にはもう傷が塞がってい

て驚いたもの」

微笑する美人さん。

すげー綺麗。美人さんは長いふわふわの髪で色がサファイアみたいに青く、アクアマリンみたいな水色の瞳をしている

そしてこの美人の容姿でさらに異世界なんだと感じた「!、やっぱりあなたが助けてくれたんですか?」というか傷については自分でもビックリだよ:

「傷をご自身で治されていましたから、わたしはベットに休ませてさしあげることしかできませんでしたけれど」

「いえ。それでも助かりましたよ。ありがとうございましたっ」
素直にお礼を言う。

すると美人さんは急に顔を赤らめて必死そうに俺を見た

「そんな! お礼は私の方から言うべきなのですっ、あの魔物から私を守って下さったのは旅人さま: あなたなのですから!」

!、やっぱり魔物! ! !

…ってか

「あの…、旅人さまってなんか堅苦しいので名前で呼んでいただけませんか?、俺の名前は高橋 澄です」俺は職員室でつちかわれた尊敬&丁寧語で話す

それで名をなるとなぜか美人は不思議な顔をした

「…?、タカハシトオル…?」

「っ! ?」

なんだ…? 今、自分の名前を全部カタカナでしかも名字と名前を分けずに言われたきがするぞ! ! ?

「た…高橋…:…澄…です」

今度はさっきよりハッキリと、名字と名前をしっかり分けて言っただが、それでも美人は少し不可思議そうだ

「タカハシトオル…?、タカハシなんて不思議な名前なのです」

「! ?、違いますよ! トオルが名前なんですっ」

「え、じゃあトオルタカハシですか?」

……………！

わ、分かったぞ！異世界って名前表記が外国と一緒にか！！

「ま、まあそうなんですかね……。あの…あなたは……？」

「私はリネアⅡファルサノⅡイセンスです」

「…っ」

Ⅱ（・？）2つきたー！ー！！！！

異世界すげー！外国でもなかなかいいねーよ！男爵とかしか！！

ってかカッコいい……

……けど、名前に反して言語はまんま日本語だ

「リネアさんですか……」

「はい。この村で巫女をしております」

「！巫女を……！！」

巫女ー！、さらにギャップきた！ゲームとおんなじだなオイ！俺等の世界の想像力すげー！

俺は初めて生でこんな萌えキャラにこんな設定の美女に会い色んな意味でときめいた

しかし、そんな俺とは裏腹に少し真面目な表情でリネアさんは口を開いた

「実は私は“神樹の林檎”を神へのお供えにする為にその樹があるあの森へ行っていたのです」

「…神樹の林檎？」

「はい。見た目は普通の林檎と変わりませんが、その味はとても美味でありなにより神が植えた林檎の樹であると言われていたのに、月1の神へのお供えには必ず供えるものなのです」

「へえ……そうなんですか……」

神が植えた林檎の樹ねえ……、あの神（子供）林檎好きなのか……？
ってかホント供えるとかこんな見た目なのに日本だなー

「やっぱり…世界が違ってても考える事は一緒なんだな……」

なんだかそれに少し安心感を覚えながらぼそりと言うと一部だけをリネアさんは聞き取ったのか疑問符をふかべた

「?違う世界…?」

「!、あ、いや!なんでもないです!」

慌てて誤魔化すとリネアさんはまあいいかと言う風な表情を浮かべてくれた

あーまずいまずい。大抵こういう場合変に話すと面倒な事になるからな……

この人は神に信仰を持ってるみたいだし…神に異世界へ送られました☆なんて言ったら大変な事になるかもしれん

俺は完全に話を変える為にふと思った疑問を口にした「ところでリネアさん」

「なんですか?」

「さっきその神樹の林檎をとり森へ行ったと聞きましたけど、リネアさん…というか女の人1人であんな化け物…魔物がいる森へ行っただけですか?」

どう考えても1人であんな化け物のいる森へ行くのはおかしい。リネアさんを見ているとリネアさんは初めて哀しそうな表情を俺に見せた

「……はい。私1人でした」

「!、本当に1人で?なんでそんな危険なこと……誰か他に護衛ができる人は?」

訪ねると俺にはリネアさんが来ている服の裾を手で握り締めているのが見えた

「……居ないのです」

「え……」

居ないのか……?

村なら少なくとも男がいそうだが……

疑問を浮かべながらリネアさんからの回答を待っているとリネアさんはとんでもない事を口にした

「……護衛ができる程の者は殆んど殺され……殺されなくとも重症を負っていて……誰1人魔物と戦える者など…居ません。」

「!?!?」

な……?!

殺された……?!

「殺されてどういうことなんですか……?!、……!もしかして魔物に……?」

「いえ。魔物ではないのです。……魔物ではなく……魔物より恐ろしい人間の手で……です」

「!?!、人間の……手で……?!」

「はい。山賊でした。ある日彼らは突然やってきて……若い女や子供を連れ去るか殺して死体を持っていき、抵抗した老人や男は皆殺しにしたのです」

……!、酷いっ……!

山賊なんているのか……?!……でも

「死体も……連れさってるんですか……?」

なんで死体を……?

するとリネアさんは俺の想像を遥かに超える答えをだした

「……恐らく。死んでいても若ければ私達“精霊人”は鑑賞ようと
して高く売れるからでしょうね」

「!?!?、せ、せいいいじん……?!?!?!何ですか?!それ!」

なんだ!せいいいじんって言ったか今!?

聖霊人?!精霊人……?!

ファントスティックな単語で俺は頭が混乱してきたのだがリネアさんはそんな俺を驚いた様子で見ている

驚いたのはこっちですよ?!

「知らないのですか……?!精霊人を……!」

「え、は、はい……すいません……」

余りにも世間知らずといいだけな目に思わず謝ってしまった
しかしまだリネアさんは信じられないと言う風だ
だか、優しい彼女はそれでも説明をしてくれた

「：精霊人と言うのは神の御加護を受けた、人間と同じ体のつくりですが、人間とは別種の人種なのです」

「神の御加護……」

そりゃまた大層な……

「人間と私達の大きな違いは2つ

1つは人間に比べ私達精霊人は体が弱いこと……」

「弱い……？ 病弱……なんですか？」

「はい。人間に比べると様々なものについての体の抵抗がなく簡単に言えば死にやすい体なのです」

「……そう……なんですか」

そんなの哀しいな……

俺が悲しげにするとリネアさんはお気になさらずと気遣ってくれた

「2つ目は人間と違い、誰しもが魔術を使えること」

……！！ まじゅっ！！？

魔術！！？ 魔術！！？

「魔術があるのか！！？」

魔術なんて素敵な単語を聞いて俺のテンションは上がっていき思わず敬語抜きで叫んでしまった

リネアさんは目を丸くしている

「は、はい……っ。ありますよ。まさかそれも知らないのですか……！！？」

「いや！ 知ってますよ！？ 魔力を使って魔術を発動っ！ って奴ですよね……！」

ゲームだ！ MPだ！ TPだ！

「そうです。それはご存知なんですね」

良かったと言わんばかりのリネアさん

俺は

なんだ？ ここって異世界じゃなくてゲームの世界なんじゃないか！？ と思うくらいだ。リネアさんは引き続き説明を始める

「……魔術を使える人間というのはかなり少ないらしいのですが。」

精霊人は生まれながらにして魔術を使う才覚を持っているのです」

「……へえ……。」

……って、ちょっとまってよ？ じゃあ……

俺って人間なんだから……

「じゃあ俺って魔術使える可能性低いじゃん！！？」

またもや叫ぶ俺。

だってさすげえ憧れの魔術を…魔術を使えない可能性が高いってことだろ！？ うわああああ！ 絶望したああああ！！

やばい。あるいみ今までで一番ショックだああああ！ 異世界については少し開き直りつつあったのにいいっ

ショックで固まっているとリネアさんが俺を何をいつているのか分からないと言うかのように俺の顔を覗いた

「？、魔術を使えない…？ トオルさま何を言ってらっしゃるんですか？」

「？、は？ だって…俺…」

リネアさん俺はね人間なんですよおお
そう言うまえにリネアさんが割り込む

「でもトオルさまは……」

「…？」

リネアさんがその続きの言葉を発しようとした時だった

「「うわああああ！？」」

「いやあああー！！」

「山賊がきたぞー！！」

「逃げるんだ！！」

「！？」

外から叫び声や警告が聞こえリネアさんを見るとリネアさんは恐怖で震えた目をしていた

「…きま…した……」

「！」

「山賊が……」

山賊！！

「ついにまた来てしまった……！！！」

リネアさんは涙目でその場に崩れてしまった

俺は急いでベットから降り、彼女に寄る

「リネアさん！しっかり！」

リネアさんの肩が震えている。よっぽど今まで酷い仕打ちをされたのだろう

だが、今までの説明を思いだすと疑問があった

「リネアさん……相手が人間ならその……魔術で追っ払えるんじゃない？」

そつと聞くとリネアさんは首を降った

……え？

「人間だから……駄目なのです。あの者達は魔術を使えない人間が多いからこそ、魔術に対抗する手段を生み出すのです……！」

「……！」

「魔術を……封じる封印石と言うものをあの者達は生み出し、魔術を使えなければ人間にも劣る体の私達をあの者達は……！」

「……！」

それはとても怒りと悔しさに満ちた言葉だった

もしかしたら殺意さえあったのかもしれない

俺はさっきまでなら自分は人間だと胸をはってリネアさんに言えたけど

今は言えなくなっていて

言うのが怖くもなって

でも同時に

リネアさん達を苦しめた山賊に物凄い怒りも感じて

山賊といってもどんななのか分かってもないし

さっき死にかけてもいたのに

あの化け物に凄い恐怖を感じていたのに

俺は思ったんだ

「トオルさま…?」

立ち上がった俺をリネアさんは見上げた

「リネアさん……」

「俺が」

山賊を……倒してやりたいと

「山賊を倒してやる」

まるで人を遠ざけるかのように木の塀で囲まれた、精霊人と呼ばれる人達の村に

我が物顔でその男たちは踏み入っていた

「おらおらっ！どうした？いつもの抵抗する馬鹿な男共はいねえのか？ああ？」

馬鹿にするような笑い声をあげながら武将髭の男は自分の得物なのだろう大きな斧を村の人達に向ける

するとその中の1人の子供が声を張り上げた

「お前たちが…皆殺したんじゃないか！！お父さんを返せえええ！！許さないからな！！」

泣きそうな悔しそうな怒りのこもった表情で叫ぶ

しかし武将髭の男を筆頭とした山賊たちは揃いも揃って笑い声をあげた

「がははははは！お父さんを返せえ？許さないい？寝言は死んで言えよ！」

武将髭の男はそう笑い声飛ばしたあと斧を無造作に子供に向ける

「！！」

「テメェから先に死ぬか……！！？」
斧を振り上げる

すると横から老人が子供を庇う

「や…やめてください…！お願いします…っお願いします…っ！」

孫なのだろう。とても大事そうに抱き締める

しかし男は斧を下ろさない「はっ、じゃあババアテメェから死ぬか……？」

「「！？」」

老人は目を見開いて男を見る。男は不敵に笑い斧を更に高く上げる回りの村人たちは声を張り上げたり目を塞いだりその場に崩れていた

そして男は斧を降り下ろした

「死ねババア。」

「――！」

ガキイイイン！！！！

するはずのない金属同士が激しくぶつかった音が村に響き渡る

武将髭の男は目を見開き止まった斧の先に居た者を凝視した

男には……いや村人さえも信じられない光景であった

なぜなら

年端もいかない見慣れない少年が鉄棒で斧を受け止めていたのだから
すると少年、……もとい俺は鉄棒を弾けさせるようにして斧を仰け
反らせる

「……?!」

それさえも驚き武将髭の男はやっと現実を見たのか俺を怒りの表情
で睨んだ

「テメエ……なにもんだあ？村の男は皆殺しにしたんだが……まだテ
メエみてえな戦える奴がいたのかあ？ああ？」

よっぽど傲慢なのか斧を止められたのが悔しいらしい。口調からそ

れが滲み出ている

……醜いねえ……

「……っというか」

俺は鉄棒を両手で持って構える

それは棒が鉄棒でなければ立派な剣道の構えだ

ちなみに本当は竹刀が欲しかったんだけど生憎なくて建物の建築に使う鉄棒をリネアさんに借りた

「……お前ら……よくこんな事しといて笑えるよな……」

睨み付けると、さすがにこんなんでもびびられはしなかったが男は斧を持ち直し俺にそれを向ける

「そりゃあ笑うさ！この奴等は魔術が使えなきゃ最弱で売れば高値がつくんだからな！！」

下品な高笑いをあげる男。

……うわぁ……めっちゃ悪役。そしてムカツク……。

「でも」

「……………っ?。」

どさっ

「弱いのが」

びゅんっ　と鉄棒を降り下ろし俺は“倒れた”男の向こう側に立つ

「!!? 大将!?’」

倒れた男に回りのしたっぱ達が集まり、何人かが俺を見た
まるでお前がやったのか? と言いたげだ

「起きないと思うぜ? 一応峰打ちにしてやったケド、しばらくは意識戻らねーよ」

自分がやったと誇示するように言ってやると

したっぱ達が俺に剣や斧を向ける

あーあーやる気ですか?

これで実力差が分かんないとは……

半ば呆れ気味にそう思った。

だからって手加減する気はさらさらないけど

「ざけんなよテメェ!! 今ここで死なせてやる!!」

こうして数えると六人。全員が俺に斬りかかる

けど、全員……筋が悪い。

「ーっ」

俺は最初に降りかかった剣を受け流しそのまま（命名）したっぱ1
の腹に打撃を食らわせる

倒れるのは分かりきっていたからすぐ鉄棒をしたっぱ2、3に向か
って垂直に横へ振る

するとさすがに一撃目では仕留められず、片方は剣を弾かれ片方は
打撃を受け流した

でも次の瞬間剣を弾いた方に一撃食らわせたから、したっぱ2撃沈。
すぐしたっぱ3も一撃で撃沈。

すると後ろに回ったしたっぱ4が俺に剣を降りおとす

「っ!」

しかし、反応できた俺はその剣を避け

首に一撃、腹に一撃食らわせたっぱ4を撃沈させた

「…っふう」

一息つくとしたっば5、6は信じられなそうな目で俺を見ていた
多分、子供がなぜ…?! 的なことを考えているのだろう
でもな、俺から言わせれば凶器がなきゃお前ら俺の学校の不良にも
勝てねえよ

うちの学校舐めんよ。県内屈指の不良多い学校なんだぞ
そしてそんな学校で生き延びた俺を舐めるなよ…!

…なんか自慢することがショボかった気がするが…

「しねえええ!!」

なんて考えてたらししたっば5がもうやけくそなのがむしゃらに向
かってきた

「……あーめんどくせー」

鉄棒だから頭とか打つと命に関わるんだよな…

だからさっきからたぶん打っても大丈夫そうな急所ねらってたのに
……

それがめんどい……

まあそれでもそこを狙うけど。

どすんっ

「…まーそんな訳で。したっば5撃沈。」

とくになにも思わず無表情でそう呟いた。

気分的にはつつくんを苛めた先輩の口のなかに野球ボールを突っ込
んだ時と同じである

しかし、気持ちとしてはそれよりもっとイライラしていると思う。
だからかな? 仲間がみんなやられて逃げようとしてる最後に残った
したっば6を逃がす気になんて微塵にもならなかった

「………さてよ。」

俺はしたっば6に近づく

したっば6はすっかり怯えていた

「ひいっ……！」

ってか16歳の少年に睨まれたぐらいで怯えんなよ…

なんか逆に哀れにも思えるな…、許さんけど

でもまず聞かなきゃな

「おい、封印石とやらは誰が持ってる？」

16歳なりに低い声で牽制するように言うともう大将が倒れて心折れたしたっぱ6はすぐに口を開いた

「大将が…大将がもってるっポケットに入ってる筈だ！！だからっ…！」

教えたから自分は見逃せとばかりのセリフに俺は呆れながらさっさと一撃を食らわせた

はい。これでしたっば1、2、3、4、5、6＋大将撃沈。

「……さて」

俺は倒れている武将髭の男、大将とやらの所に行き

ポケットを探る

……すると

「お？」

丁度卵位の大きさをした黄色の石が出てきた、石の中で中心に向かって黄色の光が外郭から飛んでいる不思議な石だ。

到底俺等の世界にあるもんじゃないだろう

俺はその石を握り

回りを見渡す。すると村人たちが黙って俺を見ていた。

あれ…もしかして俺怖がられたかな…？

やば、とか思っていたらその向こうから見覚えのある青が見えた。

リネアさんだ

「！トオルさま！」

あ、助かったー

「リネアさーん！これ封印石らしいんですけどどうしたらいいですかー？」

走って近づいてくるリネアさんに問いかける

すると

「壊してしまってください!!」

即答。

まあそりゃそうだ

俺は少しだけ石が綺麗だから壊すのがもったいないなーとか思ったけど

言われた通り壊すことにし、石を思いっきり鉄棒で叩き割った
バキン!!
すると

キィィン!

「は!？」

砕けちった石はなんと光輝き始めたのだ

え!?!は!?!うそ!?!?

反射的に爆発物かと思った俺は2、3歩さがると、光輝いた石は光の雨を村中に降らせ
すぐに光を失った

「……………」

あっという間の出来事で俺は言葉を失う
よく見ると石は色を無くしている

「……………すげー……………」

最初にこぼれた言葉はコレだった。

光の雨なんて初めてみた……

異世界すげーよ……まじすげーよ……

まだ驚いたままで呆ける

と、その時

「魔術が…戻ったぞ!」

「やった…!山賊が…!」

「よかった…!!」

などの歓声が村から飛び交った

そして村の女たちが集まりだし、山賊たちをロープで拘束する
おお、たくましい：

「トオルさま！！」

「！」

すると丁度リネアさんが俺の横にやって来た

「あ、リネアさん」

声をかける。するとリネアさんは感激の目で俺を見て、表情は嬉し
涙がでそうなほど嬉しそうだった

「トオルさま…っ本当に…ありがとうございます…！！」

「いや、これぐらい」

だって不良より弱いし…正直言ってあの化け物の方だったら無理か
もだったなー……

必要なくなった鉄棒を俺は地面に置く

「これで山賊は教会に差し出せます。そうすればさらわれた村人も
皆帰ってこれるでしょう」

「教会ですか？」

もう恒例の質問コーナー。…しかし、リネアさんは俺をじっと見る
だけで答えてくれない

「…？、リネアさん？」

待てず声をかけた…とその時

「リネア！」

ん？

リネアさんの後ろから老人が寄ってきた

あの子供を庇った人だ

よく見るとおばあさんみたいだ

リネアさんは笑顔で応える

「ばあさま！」

おお美人！

やっぱ笑顔かわいいな

目の保養だな。うん。うん。

あ、一応言っておくが別にリネアさんに気があるわけじゃないぞ？
ってかおばあさんリネアさんのおばあちゃんか

「リネア：お前も魔術は戻ったかい？」

「ええ、ばあさま」

ニッコリと笑うリネアさん。それに安心したおばあさんは次に俺を
みた

！

「……リネアや。」

「はい」

「この“御方”は何者だい？」

！？、御方って……！御方って……！

さま付けにもビックリだけど御方とか言われたの初めてだよ！

リネアさんはその質問になんだかとまどっていた。

そりゃあそうだろう

俺は自分の事なんにも話してないし。

だがリネアさんは知っている範囲で説明をするきになったらしく口
を開いた

「トオルⅡオオハシという方です。私を森で魔物から守ってくれた
方です。……」

まあ、確かにそうだよなー……結局倒れたのを助けて貰ったの俺なん
だけど……

そしてリネアさんは少し黙るうーん、それ以外知らないもんな……

さて、俺はどう応えるべきか……

普通に旅人とかいうべきかねえ……？

そう考えていると、リネアさんが口を開いたので俺はリネアさんを見
る

ん？あと、説明が？

「……そして……」

そして……？

俺は気になってリネアさんに注目する

……そしてこの後俺はリネアさんの一言によってとてつもなく面倒臭いことに巻き込まれることとなるのだった

「この方は」

「予言に書かれた勇者さまなのです。」

……………？

「……………はい？」

※

真っ白な空間

何にもとらわれず、何色にも染まる空間
自由なようで最も厄介な空間。

そう、神たちから囁かれる次元の狭間に
宙に浮かぶそれは大きな水晶を楽しそうに眺める蒼い髪の少年、アルハムがいた。

アルハムの体は水晶に合わせるように浮かんでおり。体勢はうつ伏せでくつろいだようである

その横にはアルハムとは正反対に浮かんでいるにも関わらず椅子に座っているかのようにキツチリ座っているギルシュエブの姿もあった、手にはラテン語で書かれた本がある

「…あり、なんだかトオル大変な事になってるねー」
まるで他人事のように発したアルハムの言葉にギルシュエブが静かに応えた

「……全ては貴方のせいだと思いますが？」

ギルシュエブの言葉にアルハムはほっぺを膨らませる

「うさいなあ、っていうかギルシュエブはなんでここにいる訳？」

横目でアルハムを見ると、ギルシュエブは溜め息をはきたい気分で口を開く

「……………神王さまからの命令ですよ。あなたを監視しろとのこと
です。」

それを聞いたアルハムはうんざりしたような表情だ

「うっわー……ジジイからかい……」

本当に嫌そうである。というか、神を統べる存在である神王をジジ

イなどと呼ぶアルハムはとんでもない。

ただ、それはアルハムだけではないのだけれども。

「あなたが、勝手な事をするからですよ。」

大体、あの場所、あの時、あの状況に、あの少年をおとしたせいでこの状況になったんですから。」

あくまでもクールにそっけなく言うギルシュエブにアルハムは楽しそうに笑う

「あははは、確かにこれはちょっとトオル可哀想かな？」

「ちよつとどころじゃないでしょう。確か貴方の世界の勇者と呼ばれる存在の者は気性が激しくありませんでしたか？」

「そうだねー…、トオルに襲いかかるかも？」

ま、それも経験だよ☆」

「……………はあっ」

楽しそうなアルハムにギルシュエブはついに溜め息をはいた

そして気分転換に違うたわいもない、ギルシュエブにとってはそうであった話を持ち出す

「…そういえばあの少年。以外にも強かったですね」

何にもとらわれず、何色にも染まらない空間

自由なようで最も厄介な空間。

そう、神たちから囁かれる次元の狭間

だか、神の管理する世界は何かにとらわれもし、何色にも染まる

束縛されてるようでそうでもない、簡単なようで難しい世界では

神であっても運命だとか宿命なんてものは変えられないし与えもできな

no, 6

山賊っていわれるとフ○イヤーエムブレムしかでてこない（後

どうもく相変わらずのんびり気ままに書いてますアキラです
なんか気付いたらお気に入りが増えててびっくりでした！

ので、この場をお貸りして……

こんな小説をお気に入りしてくれてありがとうございますっ！！（嬉＊

あと感想とかなんかありましたらどうぞかいてくださいますし！＊

どすんっ

薄暗く少しカビ臭さを感じる地下で大男が棒のように床へ倒れた。
見渡せば他にも男達が倒れている

その倒れた男たちを倒した、男たちを軽蔑の目で睨む青年はくると男たちに背を向けて脅えている者や希望の光を目に宿した女子供が閉じ込められている牢の鉄棒を青年の背丈に近い大振りの剣でいとも簡単に斬ってしまった

「大丈夫か」

地下に入ってから一言も声を発さなかった青年が一言そう言うとき子供は鎖を解き放たれたように涙を溢した

「はい…っ、ありがとうございます…ありがとうございます…っ」

その声に青年は安堵の表情をふと見せる

「お前たちは精霊人だろう？俺が村まで送り届けてやる」
言葉はぶっきらぼうにも聞こえるが温かさを感じられる。

「ああ…あなたさまは…一体…？」

涙を堪えながら一人の女が青年に問うと青年は剣を納めたあと

「俺か？」

誇らしげにそれに答えた

「俺は勇者だよ」

※

「……………」

前略。

異世界の母さん、父さんゲーム仲間の皆様

俺は今。物凄く困ってます。

かちやつ

「どうぞ勇者さま」

天使の笑顔でショートの美人さんが俺の前に豪華そうな料理を置く

「……………いただきます」

そんな笑顔で言われると嫌だと言えず俺は料理を口に運ぶ

そう

俺は今“勇者”にされている

……………

なんでだああああ？！！？

……というのも昨日のリネアさんによる「予言に書かれた勇者さま
なのです。」発言から始まった事である
はい。リプレイ

「俺が勇者あ…?!」

ありえないアリエナイアリエナイいい!

え? 何? 異世界から来た!! 勇者とかベタ過ぎだろうが!! あれだろ? 魔王を倒して下さいとか言われる奴か?!

俺はそんな面倒くさいの嫌だ!! 俺は魔術さえ使えて異世界見れたらそれでいいんだぞ!!

もう来ちゃったもんはしょうがない。どうせなら異世界楽しもうぜ
プランを俺は心で叫んでみるが

目の前のリネアさんはもうそれはそれは輝いた目をしていらっしや
いました

「はい! トオルさまは勇者なのです! 御自分で自覚がないと言うことはトオルさまは勇者に選ばれたのです!」

リネアさんは村の巫女だからかその言葉に他の村人まで歓喜をあげ
始めてしまった

「あの方が…!」

「勇者さまだあ!」

「だからお強いよね…勇者さま…!」

「……!、違います! 俺は勇者なんかじゃありませんよ!?」

神ならこれぐらいのことでしそうで断言できなかったが俺は必死に否定する

ってか…

「なんで俺が勇者なんです?!」

村救った位で大袈裟な!

そう思いリネアに疑問をぶつけると

リネアさんは待ってましたとばかりに口を開く

……リネアさんって…こういうキャラだったんだ……

「それはこの世界に存在する全ての巫女に与えられる予言の書に書

かれているからですっ」

「予言の書…?!」

そんなんあるのか!?

「っっていうか世界の巫女に?!」

「あ…トオルさまはそういうものに疎かったのですたね

巫女というのは簡単に言えば教会に認められた教会の使者なんです。それを巫女又は使者と呼び教会から送られる情報や物資を受け取り監督の地域にそれを渡し、また必要ならば助言をする者なのです。私は自分の村が監督地域なんですよ。」

「そんなものがあるんですか…」

教会ってのは凄い影響力もってるんだな、なんか昔のフランスとかみたいだ

何も知らない俺にリネアさんは慣れたのか嫌な反応ひとつせずそのまま続けてくれる

「予言の書は巫女や使者が教会から受けとるもので、大昔…まだ歴史など書き残してもいない頃から存在する、世界に影響するほどのコトを予言しているものなのですよ」

…あー、マヤの予言みたいな奴かあ

「…それに俺のことがのつてると?」

「はい…。私も半信半疑で読んでいましたが」

「?半信半疑?」

「ええ。実は予言の書に書いてあることは何百年単位で書いてある所が多くて当たったことがあるのかよくは知らないんですよ」

「……………」

…それ、駄目じゃん…!

疑いの目でリネアさんを見る

「ですが…渡すのですから当たるんですよ…!そしていま当たったのです!」

とリネアさんはフォローをいれたがもうすっかり俺は信じる気になくなっていた

…絶対俺じゃねー

「…予言には

“ 苦に泣く民を救う者 ルシレア5638 8の月11つきの日 東の陸にあらわる その者勇もつ者なり”

とあるんです！」

おおおえええ?! 年、月、日、場所ピンポイントかよ?!

どうせ曖昧なものだろうと思っていた所にまさかのピンポイントがきてちよつと焦る

「…………ちなみにココと今日は……」

「東の大陸ルルア、ルシレア5638、8の月11の日です」
につこりと天使の笑顔で微笑むリネアさん

いや、でもでも……!?

「大陸なんて広いですから俺は違いますよきつと!」

そうにちがいない! ううん、そうに決まってる!

希望を抱きながら考えられる可能性を述べた
しかし

「予言は出来事が被ることなどないと…されているのですよ。それこそ神様の悪戯がないかぎり」

続けて笑顔で言われた。

……………

あんの神いいいいいい!!! 悪戯だからああああ!!!

…と言うわけである。

簡単に要約すれば、リネアさんの早とちり&mp;あの神のせいで俺は勇者に祭りあげられた…ということだ。

よって今俺はめっちゃくちや丁重に扱われている。

……しかも

かちゃ

少し動くと金属のぶつかる音。

腰を見れば細身だが立派な銀の剣が携わっていた

………持たされちゃった☆どころの騒ぎじゃない！銃刀法違反！
！まあ異世界だから関係ないけど！

しかも聞いた話だと、この世界では私怨だと立証されない限りは殺しは罪に問われないらしい。

……やっべやっべ

……まあけど、武器持っていないと魔物のこともあるしな
だからなのだろう。だがそんな話を聞くとやっぱりこの世界は危険
なのだなと思う

……もぐもぐもぐ

「……うまい」

見た目に比例して料理はうまい

けれども、俺は勇者なんかじゃないしこんな処遇は駄目だろう。

とりあえずこの料理は村を助けた札だと割りきるけど、これ以降の
ものは受け取っては駄目だと思うのだ。

「ごちそうさまでした」

食べ終わり

うまかったしちゃんと気持ちを入れてそう言うとききの美女さん
やほかの女の子たちが次々に口を開く

「勇者さまどうなさいますか？」

「なんでもお申し出ください」

「あ……いや……じゃあ仮部屋に行きたいです……」

勇者と言われて年上に敬語などをつかわれると俺がまいってしまい
そうだ……

美女さんたちはすぐに俺を案内してくれ、最後に俺が“俺は勇者なんかじゃないんですよ……?”と言うと彼女たちに“そんなことありませんわ。それにもし違っていても村を救って下さったことには変わりありませんもの”

と言われてしまい。無下にこの処遇をやめろと言えなくなってしまった

「……………はあ……」

ベットにぼすんつと仰向けに倒れるとため息がでた

……もしかしたらさゲームみたいに異世界から来た俺は勇者なのかもしれないけど……

勇者なんて柄じゃないしなあ……俺は

「…………」

俺はベットから起き上がり、窓まで歩いた。窓といってもガラス張りじゃないけど、そこからは来たときとは全然違う明るさが見えた皆明るい顔をしている。

「…………」

俺はそんな人たちを見て少しだけ

こんな風になってくれるなら勇者か勇者もどきでもいいのかもな……
そう思え

そして、早く教会とやらが連れて行かれてしまった村人を助けてくれれば良いのにといいながら皆を眺めた

……しかしその時だった

「……………ん？」

この家が高いのかちよつと頑張ればココから村の入り口より向こうの方が結構見えるのだが

向こうの方に人だかりがあるのだ、ここからだとはよくは見えないが………まさか

「残党……!?!」

だっ!

俺は反射的に走り出し、途中で声をかけられながらも走り村の出口に行く

もしかしたらあの山賊の残党かもしれない……

「村の外にはでないでください!」

そう叫びと、勇者効果は凄くてすぐ村人たちは従った

そして俺は村の外に出てあの人だかりを探す

……すると

「……!」

俺は凝視した。近くなり見えた人だかりは

金髪に緋色の瞳、軽めの防具を身に纏い、背丈ぐらいまでであろう大剣を背中に携えた18才くらいに見える青年を筆頭に女子供が歩いて来ていたものだったのだから

……! 金髪に緋色とかかけー!!

自分が日本人なのが嫌になってきそうだぜ!

……けれど

「……まさか……」

それを見て少し嫌な予感を感じつつ。走って彼に近づく

するとその青年はこっちに気付いて止まった

近くで見るとやっぱり緋色が綺麗で、見た目は普通に18才という感じなのに強そうな雰囲気醸しだしていた

「……」

俺は近づいていく、どのタイミングで話しかけようか考えていると先に彼が口を開いた

「お前は何者だ」

警戒しているのが声色で分かる

「……俺はある事情でこの側の村に居させてもらっている者です。あなたは……?」

刺激してはいけないと思い余計な事を言わずにそういうと青年の後ろにいた女の人の一人が口を開いた

「さ…山賊は……？」

「……！、まさか連れていかれた人たちですか?!」

それならこの人数も納得できる

「ああそうだ。俺が助け保護し、村まで送り届けにきたんだ」

……よかったあ……、じゃあこの人教会の人なのかな……?

「そうなんですか……!よかった、村の人たち、連れていかれた人たちを凄く心配していたんです!」

そう言うとき子供たちは安堵の表情を見せる

「じゃあ、あなたは教会の人ですか？」

青年を俺はちらりと見る。

……すると、青年は誇らしげにそれを発したのだった

「いや。俺は勇者だ。」

「……………」

え……………、ええええええええええ!!???

うっそん!うっそん!!

まさかのいきなり本物勇者登場う!??まさか!そんなばかな!

いきなりの展開に絶望を感じつつ俺は恐る恐るそれを聞く

「……………東の大陸で、ルシレア5638、8の月11の日ってか昨日…村救った?」

「ああ。そーいや救ったな」

「……………」

あーあーあーあー

本物の勇者さま登……場……。

なんか嬉しいようなじゃあ村の人たちをどうしようとか俺の頭の中をさまざまなものが駆け巡る

しかもそうしていると

「トオルさま…！」

「！…あ…！」

リネアさん…が…来まし…た。さらに

「リネアさま！」

「リネアさまだわ！」

「巫女さま…！」

女子供たちが歓喜をあげる。それにリネアさんも気付き表情が喜びのものになった

「皆…！！あ本物に皆なのですね…！！」

涙目で喜ぶリネアさんに青年が声をかける

「あんたがこいつらの村の巫女か、見ての通りこいつらは無事だ。

山賊も俺が倒そう。」

…！！

やべ…！

俺は確実に今冷や汗を流した。そしてリネアさんは当たり前のように

「ああ…ありがとうございます、教会の方。まさか連絡から半日もしない内に助けていただけなんて…。ですが山賊だけならもう解決いたしましたわ」

と笑顔。

しかし、それに青年はぴくりと眉を動かした

「山賊を…？聞けば封印石で無力化していたと聞いたが…。しかも俺は教会の者じゃない」

「教会の者じゃない…？ならあなたは…？」

ふとりネアさんが聞く。

あああああー！！

「俺は勇者だ。」

勇者さまは誇らし気にお答えになりました。

「勇者さま…？」

心地よい風が吹き渡る中、リネアさんは勇者と名乗った本物の勇者を見つめる

一方の勇者は当たり前前のことを名乗っただけなので変わらず誇らしげである

ちなみに俺は自分は悪くないというのに無駄に心臓バクバクで、例えるなら母の物を壊した事を母に告げた感じだ

どうだ！？これでかなり親近感わくだろう！？？

…しかし、早めに自分から言い出して誤解を解いた方が良さだろう。
…悪い予感がぶんぶんするし。

「あ、あの…」

言い出す事を決め、俺は勇気を出して口を開く。すると二人がこちらを向いた

「…リネアさん！分かったでしょう？俺は勇気じゃなくてですね…
っ」

“この人が勇者なんですよ” そう続けて言おうとした時だった

「何を言うのです！トオルさまが勇者なのですよ！！」

リネアさんが否定するように声を張ったのだ

「へ！？」

「！？」

俺は本物の勇者の前で改めて否定されたことに焦りながら勇者を見ると、案の定勇者さんは俺を警戒と…おそらく怒りの眼差しで見えていた

……ヤバイヤバイヤバイ！！

俺はリネアさんにキチンと言って勇者さんにも誤解を解いてもらおうと、まずリネアさんの前に立つ

「リネアさん！落ち着いて！ホントに俺はちが…」

と、その刹那。

ひやり。

首筋に金属的な冷たさを感じた

「……」

俺は冷や汗たらり。リネアさんは驚きと少し怖がったような表情

「…………お前」

そして後ろから低い、明らかに敵対心と怒りをむき出しの声で勇者さんが言う

「“勇者”を騙るとはいい度胸だ」

：ヤバイっ！！勘違い完璧されたああああ！！

「いや、別に俺は名乗ってた訳じゃ…！」

「問答無用！！」

そう言うとき勇者は長くデカイ剣を振り上げる

…！！

俺はその瞬間リネアさんに向かって飛び込み

リネアさんが剣に巻き込まれないように一緒に剣を避ける

「トオルさま…！」

「っ！」

いきなりだったから倒れ込む形になったが上手く避ける事ができ剣は地面にささった

…けどっ

「おい！リネアさん巻き込んだらどうするつもりだ…！」

あんな長い剣使ったらリネアさんまで切られてたかもしれないのに！
罵倒すると勇者はあんな自分の背丈ほどある剣を軽々と地面から抜き肩の防具にのせるようにして担ぐと睨み気味に俺を見る

「はっ、勇者を騙るニセモノの悪党やろーが更に演技でイイヤツのフリか…？」

「な…！！」

今のは流石にカチンときた…っ

なんであんだだけで悪党とか演技とか決めつけられんの…!?

お前の方が悪党くせーよ!!

俺も勇者を睨む。

「大体、その奴に当たらないようにしたに決まってるんだろ」

嘲笑うように言うと言者は剣を構える

それを見たリネアさんが立ち上がった

「何をする気です!! それと先程トオルさまを悪党などと罵倒しましたがそれは大きな間違いですよ!! 口を慎みなさい!」

「リネアさん…っ」

やば、ちよっと涙でそう。リネアさんかっこいい…

俺は立ち上がりながらリネアさんを見る

しかし、勇者さんはそんな言葉が気に触ったらしく苛立たしく剣を俺に向けた

「…巫女のくせに勇者を見分けもできないのか…?、…ま、いい。

ニセモノは本物が消してやるっ!!」

「!!」

は!?!消すって!?!要するに殺すってことか!?

「ちょ…ま…!!」

ぶん!!

勇者は聞く耳をもたず剣を俺に向かって降り下ろした

「わっ!?!」

すれすれで避けると降った剣で起こった風が俺の髪を揺らす

…このムカツク勇者さんまじで戦闘する気かよ…っ!

「トオルさま…!!」

リネアさんの声が耳に入る、リネアさんを見る余裕なくすぐさま勇者さんが構え再び俺に刃を剥く剣を睨み

ふと存在を思い出した銀の剣を腰から探る。するとひんやりとした金属が手に触れた

俺は勇者さんと間をあけながら静かに剣を鞘から取り出す、銀の剣

は見た目と違い軽めで竹刀より軽いぐらいだ。

だが、竹刀より遥かに頑丈^{こよう}。

「…」

構えると、勇者さんはちらりと俺の剣を見た後一歩前に出た

「…やるのか？流石にココで逃げ出す程根性腐^くってはないか」

…いちいち言い方ムカツクな。

「ニセモノだからって嘗^くめるよ？勇者さんっ」

初めて言い返してみる

すると意外なことに勇者さんは無駄に怒る訳ではなく代わりに

「なら実力で証明しろよ！」

と微かに楽しそうに叫びこちらへ走ってきた

多分この勇者さんは根っからの戦闘好きなのだろう

ここで怒りに任せてきたらあの山賊と同レベルだけど流石勇者と言うだけあってそこまで低能じゃないらしい。

「ていやあっっ！！」

勇者さんは両手で剣を構え、剣を上から下斜めに向かって勢いよく降り下ろす

「っ！」

ぎいいん！！

と、それを俺が剣で受け流すようにして受け止めると、金属同士の削り合うような音が鳴り響く

相手は大振りの剣。一回振ればスキができるっ…！

地面を蹴り、勇者さんの懐に入り込む

しかし

ぶうん！！

「な！！？」

がぎいいん！！！！

懐に突っ込む直前に予想より遥かに早く剣がまた振られ間一髪で剣を受け止めた。すぐまた勇者さんと距離をとる

「甘いんだよっ」

勇者さんが余裕の声で剣を構えた

「…すげっ」

思わず感嘆の声がもれる。流石と言うべきか、あんなでかい剣を普通の剣と同じ速度で振り回せるなんて…

そして同時に少しまずい。どう見てもあっちとこっちの剣じゃ攻撃力もリーチもあっちが上だ。

こっちは機動力、速さで勝負しようと思ってたのに、普通の剣と同じ機動力と速さを誇るんじゃないかとこっちが不利だ。

「……」

じりじりと互いに距離を置いたり近づいたりする。

……まあそれなら俺は技術で勝負するか…っ

息を飲み、俺は勇者さんに向かって走り出したっ

それを勇者さんは馬鹿を見るかのような目で俺を見て剣を構え直す
だが俺は構わず真っ正面から剣をぶつけた

がぎいんっ！！！！

力一杯ぶつかり合った剣と剣は激しい音を鳴らす

「馬鹿かお前！正面からの勝負で俺の剣にお前の剣が勝てるか！！」

「ぐっ！」

勇者の言葉通り俺が勝てる筈もなくしかも細身の剣は大振りの剣に
そのうち折られてしまいうさだ

だが、俺の目的は…！

「うらあ！！」

剣と剣がぎりぎり押し合うなかで俺は一気に相手の剣の下を相手の
の剣から自分の剣で俺は自分を守るようにしながらぐりぬけ
その勢いのまま勇者さんの足元を蹴る！

「！？」

勇者さんは剣に気をとられており、俺の蹴りで前に倒れ込むように
して体勢を崩した

「何…っ！！？」

今だっ…！！

俺は勇者さんを背中の前にそのままいき、すぐ振り返って勇者さんの首元に剣を添えた

「……」

「……」

少しの間沈黙する

先に口を開いたのは俺だ

「……俺の勝ち……だな。」

間違っても首を斬らないように気を付けながら声をかける。

「……………」

勇者さんは沈黙している。……なんだ、もっと騒ぐかと思ったら案外静かじゃないか。

……と、そう思ってた時だった

「“ライト”」

「ん？」

勇者さんがなんか呟いた。らいと……？光……？

何を言ったのか今の優勢は変わらないので少し考える、しかしその次の瞬間

勇者さんの足元が数秒間光輝いたのだ

「え……!?!」

そして

ドオオオオオオン!!!!!!!!!!

————!?!?

背中に強い衝撃と熱が走る

それを感じた数秒後に強い痛みが背中から身体中を走り抜けた

「うがぁぁ!?!?」

視界には光の光線が消えていく光景があり、その中で勇者さんは急いで体勢を取り直す

俺はなんとか倒れずに踏ん張ることが出来た

：な、なんだ今の…つまさか…魔術って奴か…?!

「…痛てえ…っ、何…したんだよっ」

背中の痛みを堪えながら勇者さんを目で捉えると勇者さんは得意気な顔をしていた

「“魔術”だ、分かるだろ？…詠唱を省略可能な下級魔術を詠唱なしで発動すりゃ威力が落ちるが勇者^{おれ}が使えば下級魔術も中級魔術並みの威力になる。間を置かずに俺を斬るなりなんなりして詠唱の暇を与えないことをしなかったらお前の勝ち^{おれ}は決定していたのにな」

「うっそ…!」

そんなの知らなかった…!! あああっこんなことならリネアさんにもっと魔術について聞いて置けばよかった!! 俺は軽い絶望感に襲われながらも、もう一度勇者さんと対峙する
……ってかさ

「……ならさ、次からはそんな暇与えなきゃいいんだろ…??」

俺が剣を構えると勇者さんも剣を構える

「できるなら…なっ!」

そして勇者さんがこちらに走り込み、剣撃が打ち込まれる

「っ…!!」

がん! ぎん! がん! がん!

剣同士の打ち合う音が静なこの場所に空気を伝って響き渡る

向こうの攻撃は重くて俺は剣をへし折られないように力を受け流しながら対抗する

…っ向こうの攻撃受けるだけで精一杯だ…!!

先ほどのような滑り込みはこんな撃ち込みの中では出来ない
さらに…

「“ライト”!!」

「!!」

ドオオオオオン！

その単語に反応し一気に勇者から離れると俺が勇者さんと剣を撃ち込み合っていた位置に光の光線が勢いよく落ちた

…っ魔術…！！

よく見ると勇者さんの足元が光った時にそこには光の円が浮かび上がっていて、俺はあれが魔方陣なのだと察した

うっ…こんな状況じゃなきゃ魔術で超テンションあがんのに…！！
だがそんな暇はなく、魔術を避けた俺に数秒後勇者さんが追撃をかけてくる

「うらあ！！！」

がん！！

勢いよく振り落とされた剣が構えた俺の剣におち、その重さと衝撃に腕が痺れる…っ

まずい…一方的だ…っ

隙なく撃ち込みつづける剣撃…少しの間で発動される魔術…っ

何か…何かないかっ？この状況を打ち破る何かは…！？

「っ“ライト”！！！」

つまた…！！

ドオオオオオン！！

光線がおち、間一髪で後ろに退き避ける。避けれはしたが光線の熱を肌で感じた

「危な…！」

「どうした？発動する暇を与えないんじゃないかったのか？？ニセモノやろう」

挑発するような勇者さんの声が光線が地面にぶつかったせいで起こった砂ぼこりの向こうから聞こえる

くそおっ…魔術使えるからって偉そうに…！！

苛だたしく思いながら剣を構え直そうとしたときだった

何かが俺の中で引っ掛かったのだ

……そういえば

なんで勇者さん今攻撃しにこずに話したんだ…？

俺を警戒？…いや、魔術で体勢崩すのは分かってるだろうし……
ならわざわざ俺が態度を直すのを待った…？

…けど勇者さんとはいえあの様子じゃそんな生易しいことしないだろうし……

じゃあなんでわざわざ…？

「呆けてんじゃねーよ！」

「わっ！！」

考えてる途中で勇者さんが再び俺に剣撃で攻撃しはじめた

…駄目だっこんな状況じゃ作戦もたてたれない…！

俺は周りをちらりと見渡しなにか考える時間を作る場所を探す

…と、見てみると村とは反対の方向に森が見えた

村の方にもあるが村を通るのは止めた方がよさそうである

……よしっ

だっ！！

決めると俺は森に向かってダッシュした

「！？てめっ…！逃げるきか…！」

勇者さんは逃がすかとばかりに予想通り俺を追いかける

「トオルさま…！」

「リネアさん！ちょっと行ってきます…！」

リネアさんをチラリと見てそう言い、勇者さんに追い付かれないように走り抜ける

「まちやがれ！ニセモノやろう…！！！」

「待てと言われて待つか…！」

んー…なんかつい最近こんな状況になった気がするなあ……！
…お

とかしてる内に森に入っていく。魔物の心配もあるがその時は勇者さんがなんとかしてくれるさ！！だって勇者さんだもん！！
他力本願で森に入っていき思った通り木々が迷路みたいに生い茂って
いて

隠れて少し考える程度には時間稼ぎができそうだ

「南無三！！」

叫び、道はずれて木々のなかに入り込む

「待てええ！！」

すぐ勇者さんの声がしたが無視して進み、ちょうど木々の回りに草むらが生い茂っているというステキスポットを見つけてそこに入る
「……ふう」

一息つき、勇者さんの声はかなり小さくなったのを確認し、考えを始める

「…さて、どうする…かな」

正面から挑んでもさっきと同じだっ。どうすればあいつに隙を作れる…？

「…いや」

本当に隙がないのか…？さっきも考えたがなんであいつは魔術のあと直ぐ様攻撃しなかった……？

考える俺…！！何か…何か…！！魔術を使ってすぐ攻撃しなかった理由…っ

頭をがしがしと掻きながら考える、とその時

「……あ」

俺の脳が閃いたのだ。

「…もしかして“攻撃しなかった”んじゃないくて“攻撃できなかった”……？」

そうだ…っそれなら納得できるっ

もしかして魔術を使った後って反動で動けないんじゃないか…？

「…だからそれを誤魔化す為にわざと喋った。」

なら反動で動けないのは多分5秒弱くらいだろう

もし攻撃が当たらなくても相手がひるめば十分稼げる時間だ

「よし…っ分かったぞ…！」

魔術を使った時…勇者さんに隙ができる…！！

「……待ってろよ勇者さんっ」

そっと立ち上がり剣を握る。

人生初の対勇者。

俺は最初は心臓がバクバクだったが
不思議と笑みが浮かんでいた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9519k/>

好かれ者！

2010年11月5日10時17分発行